静岡新聞
平成15年(2003年)11月17日 (月曜日)

第1回沼津文学祭

牧水題材に豊かな饗宴

あらたな姿で現代に

◆池内 紀氏

▼▼ゆるやかな運動

十一月六日の「文学アラカルト」四回目がしめくくりだった。沼津文学祭が終了した。市制八十周年を記念して、今年が第一回。メーンテーマは「牧水 あらたな旅立ち」。

一つの催しであり、テーマをもった企画だったが、それ以上に、ゆるやかな運動だった。小学生からお年寄りまで、いわば八歳から八十歳まで、市民がこぞって参加した。この点できわめてユニークな「祭」だった。

はじまりは一年以上も前にさかのぼる。若山牧水の紀行文を編んだのがきっかけだった。沼津市教育委員会文化振興課という、おかたいところから声がかかった。文学祭実行委員会をつくる。ついては助言者になってもらえないか。

つねづね「自由」をモットーとしてきた。組織やデハデな打ち上げ花火ではなく、しっかりと地に根づかせていく。たとえささやかでも、そのような祭典なら、おみこしをかつぐのも悪くない。

といって私自身、何をしたというのでもない。四方委員長ほか実行委員会は八人ばかり。事務局の原案を検討する。アイデアを出す。分担して働きかけもらおう。また中学生に短歌コンクールを呼びかける。若い人のための短歌講座はどうか。市中にある牧水ゆかりの地を巡り、あらためて町歩き。音楽家に音で「文学」をつづってもらえないか。基調講演、シンポジウム、朗読パフォーマンス、交流会…。

ごくわずかな予算で、こんなにも豊かな饗宴がナントカ会には一切かかわらない―そのはずが、ふと気持ちが動いた。一回限りのイベントではなく、息長く続ける。一方的な市の催しではなく、市民が気軽に参加する。ハードルが高くない。着々とすすむのを片隅でながめていただけである。

▼▼絵や音楽で表現

歌人牧水にちなみ、小・中学生には牧水の歌をイメージして絵を描いてできる。鉛筆とクレヨンで、小学生がいかにあざやかに歌をつくり換えるものか。中学生には俳句智式短歌など、お手のものだ。ためしに入選作の一つ。「水のようにすんなりさらさらいきましょうそれがなかなかできないわたし」(愛鷹中・渥美祐輔)。

前夜祭に立ち会った人は、ピアノとバリトンで「詩」が綴られたのを知っている。シンポジウムのテーマは「現代に生きる牧水」だった。あわただしく浮き沈みする政治や経済とちがって、文学はくり返し、あらたな姿で現代にもどってくる。

▼▼無限に人を吸収

経済性や効率が時代のモットーのようだが、それがどんなに人と社会を荒廃させるものか、日々の事件が告げている。つい忘れがちだが芸術や文学は無限に人を吸収する力があり、あくせくした日常をこえて、好みのままに一つの色や一つの音、一つの歌に同調できる。ことのついでに自分もちょっぴり、即席の歌人にも詩人にもなれる。

それが何の役に立つかはわからない。しかし風がすがすがしい空気を運んでくるように、精神の新陳代謝に働きかけるのではあるまいか。いちど知れば、こんどからはちがった目で世の中をながめられる。それはとても大切なことなのだ。

沼津文学祭は二年目ごと。あいだの一年は反省と準備にあてられる。沼津の文学ビエンナーレがしっかり根づいて、うしろに控えた富士のお山と背くらべをするように育つといい。

(ドイツ文学者)